

古いものを整理していたら、すっかり忘れていたものが出てきた。レポート用紙6枚。

昭和60（1985）年2月17日（日・晴）の日付。38年前だ。タイトルは「聞き書き・足立巻一氏」とある。

これは足立巻一氏が当時『思想の科学』に連載していた「生活者の数え歌」の取材で、重度障害児の祐気君を育てている川上美智子さんを訪ねて播州赤穂上郡へ行かれた時のもの。わたしは、神戸新聞投稿仲間の八田光代さんと二人でお供をさせてもらい、帰宅してから足立氏の言葉を書き留めたのだった。正式に取材したものではなく、録音もしていない。わたしたち相手に身構えることなく喋っておられて、そのお人柄も見えるものだ。一部は拙著『触媒のうた』に載せたが、この際ごく個人的なものを除いて全てを書き残しておこう。中でも竹中郁についての話は貴重だろう。

○ いやあ、失敗してしまいました。家内に怒られました。（待ち合わせの須磨駅へ時間に遅れて来られて、額をかき

ながら）。

○ あれでええやないですか。（姫路駅で乗り換えの待ち時間で、わたしが外へ出たの昼食を提案したら、駅の立ち食いソバを指して。220円だった）。

○ 懐かしいですなあ。（上郡駅の待合室の椅子の柄柄の座布団を見て）。

○ 小説が書きたかったんですがねえ、小説は難しいですねえ。（若い頃の話）。

○ ペンネームは飽きてきますねえ。わたしも昔、大分使いましたけど。

○ わたしも若い頃は、人の作品が気に入りました。こんな書かなあかんのかなあ、思ったりして。この頃は開き直りです。

○ 死んだら解る思っとるんですわ。（自分の作品を批判する人について）。

○ あんなこと書くなど言ってるんです。肩ひじ張って息切れしとる。詩だけにしとけど。（同人誌のTさんの論文を指して）。

○ 蝶々（ミヤコ蝶々のこと）怒って来よらへんかいな。（南都雄二さんのことを書かれたエッセイについて。以前、テレビの人気番組「夫婦善哉」の構成をしておられた）。

○ 川上さん、どこに座られますか？それじゃわたしは左耳が悪いのでここに。（川上さんは今回の取材相手）。

○ このままの方がすっきりしていいですよ。書いてもいいですけど、臭みが出ますから。絵と合わないこともありますし。（わたしたちの同人誌「地平線」の題字をお願いしたのだが）。

○ そんなことないですよ。（川上さんが「近所の人が、『あんた天狗になったらあかんで、先生が同情してくれてはるんやから、そんな人の中では上手ゆうだけやから』、言わはるんや」と言ったのに答えて）。

○ また来ましたよ。（祐気君が部屋に入ってきたのを川上さんが気づかないので）。

○ 大変な生活ですなあ。（川上さんが席を外した時にしみじみと）。

○ ご主人が小説を書かれるのも、美智子さんが詩を書くのと同じで、祐気君が書かすんでしような。

○ 新しいのを送ろうか？（わたしが署名をお願いして差し出した氏の著書に、わたしの名前を書き間違えて）。

○ 珍しく純真な人ですなあ。（川上さん

のこと)。

○ いやあ、生徒から慕われたでしょう。(川上さんの教師時代について)。

○ これを敷いたら？(大きな餅を切るためのまな板を川上さんが探している時に、自分のカバンを差し出される。結局はまな板で切ったが)。

○ 俗ならわたしが一番や。(川上さんと比べてわたし(今村)なんかは俗ですと言ったのに)。

○ 今村さんや八田さんは幸せやで。

○ いいでしょう。(わたしが、杉山平一さんの詩いいですねえ、と言ったのに)。

○ どんどん書いたらいいけれど、詩集は慎重に出さないといけませんね。詩集が勝負です。

○ 誉める人がいれば、同じだけ反対の人がいると思っとかないと…。

○ いわゆる現代詩と違って、心がありますね。(読者文芸欄の詩について)

○ 純真な人、童心を失っていない人が多いですなあ。(読者文芸欄投稿者)。

○ 今村さんや八田さんや川上さんが出てきた時はうれしかったですよ。(詩の欄のレベルが上がるから、と。三人

はほとんど同時に投稿を始めていた)。

○ 彼(灰谷健次郎)は偉いですよ。作品で答えてますから。(批判に対して)。

○ 性格ですなあ。竹中さんは厳しかったですなあ。(評の甘さ辛さについて)。

○ わたしが竹中さんの評伝を書くのは、竹中さん個人を書くことだけが目的ではありません。大きなテーマは、日本の児童文学の歴史です。北原白秋から竹中郁、そして灰谷健次郎、鹿島和夫などにつづく、歴史です。竹中さんは白秋の弟子でしたし、竹中さんが詩の世界に入ったのは、白秋の勧めです。竹中さんがヨーロッパへ行く時も、お父さんが白秋に「あいつ、ものになるでしょうか？」と尋ねられた時に、白秋が「素質がある」と伝えたそうです。そうして彼はヨーロッパへ行くことが出来たんですね。そしてそれが、戦後の“きりん”へと繋がってゆくんです。そして“きりん”時代の竹中さんを書けるのは、わたししかおらんのです。これを書くことによって、灰谷へとつながる太い児童文学の歴史を書くことになり、今ある灰谷への批判なんかも消し飛んでしまいます。

○ “きりん”はそのうち復刊されますよ。

○ 同業者や町内会のようなのでは巡り会えませんよ。詩を通じてこそですね。(「八田さんたち、いい人と知りあいになれてうれしいです」とわたしが言ったのに対して)。

○ あれは嫌ですなあ。(確定申告のこと)。

○ 家内、帰ってるかなあ？あるある。締め出されたら困る。(帰りの須磨駅で、家の鍵を探しながら)。

○ さあ、来月は高見さんのところへ行こうか。

○ あなた方も体につけて、お元気で)。

この半年後にお亡くなりになるとは思いもしなかった。最終回にはわたしに取材をとおっしゃっていたのだったが。

この上郡での取材のことは、『思想の科学』に掲載の後、氏の没後に出版された『日が暮れてから道は始まる』(1987年・編集工房ノア刊)に収載されている。